『ユーラシア世界』へのいざない1

ロシアは西か、東か
――問い自体を問い直す

『UP』（東京大学出版会）二〇一二年六月号

塩川伸明

ロシアは西に属するか東に属するか――この問いかけは、一種の「永遠の問い」ともいうべき様相を帯びて、繰り返し人々の胸を騒がせてきた。一九世紀ロシア思想史の最大のトピックが西欧派vsスラヴ派という対抗関係だったことはいうまでもない。「ペレストロイカ」が合い言葉となったソ連末期の一九八〇年代後半にも、ネオ西欧派とネオ・スラヴ派の論争が論壇を活気づけた。ソ連解体後の今日も、ロシアをはじめとする旧ソ連諸国は西欧型の道を歩むのか、それとも何らかの意味で独自の道を進もうとするのかが問われている。

「東か西か」という問いの立て方自体に反撥する発想もある。ユーラシア主義と呼ばれる潮流は、ロシアは同時に西でもあり東でもあると主張する。この思潮は部分的に鋭い問題提起を含むが、往々にして、ユーラシアたるロシアは東西双方の長所を総合することができ、ヨーロッパとりわけ近代西欧に対する優越性をもつとか、そのようなロシアにはヨーロッパとアジアを統合する歴史的使命があるといった独善的主張につながりやすいという危うさをかかえてもいる。

「東か西か」という二者択一をそのまま受け入れるのではなく、かといって「東でもあり西でもある」といった独善性に陥るのでもなく、問題を立て直すにはどうしたらよいだろうか。まず思い浮かぶのは、「東」とか「西」という概念自体を問い直すことである。東と西が二項対置される場合、「西」は文明を象徴し、「東」は野蛮や後進性を意味するという理解が暗黙に前提されがちである。この前提に反逆して、東の西に対する優越性を説く立場もあるが、これ自体、二項対置図式そのものは温存して、ただ正負の符号を入れ替えているに過ぎない。そうではなくて、そもそも「西」とか「東」と呼ばれるにふさわしい実体があるのかということを問題にしなくてはならないだろう。

「西」が文明・進歩・近代などを象徴するという暗黙の前提

は、非西欧世界に広く見られる「西欧近代」への憧れ――それは容易に反撥にも転化する――に由来するが、それは一種の幻想的観念であり、現実のヨーロッパ世界がそうした観念だけで割り切れるわけではない。他方、「東」と括られる地域はあまりにも広大かつ多様であって、そこに単一の本質のようなものがあるわけではない。とすれば、西と東をそれぞれ一つの固定的実体のように見なして対置することはできない。

ここまではある意味で当然のことだが、にもかかわらず「ロシアは西に属するか東に属するか」という問いが繰り返し浮上するのはどうしてかという問題は、依然として残る。ここで必要なのは、この問い自体にどう答えるかということよりも、むしろどのような状況がこの問いを多くの当事者たちにとって切実なものたらしめてきたのかを考えることだろう。

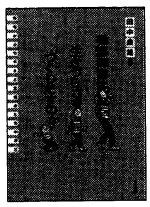
「西」への憧れと反撥に引き裂かれるという状況自体は、他の非欧米諸国と共通するもので、ロシアだけの固有性ではないし、日本もその例に漏れないという意味では、これは他人事ではない。そのことを確認した上で、ロシアの独自性をいうなら、地理的に西欧と近接し、接触の歴史も古かったという事情から、ヨーロッパに対するアンビヴァレンスが日本やその他のアジア諸国におけるよりもはるかに深いという点が挙げられる。広義のヨーロッパの一部に属すると同時に、ビザンツ文明受容、モンゴル＝タタール支配などによって西欧とは顕著に異なる性格を帯びてもいるという両義性がロシアを特徴付けている。そして、そうした位置にあるという事実こそが、先の問いをとりわけ切実なものたらしめ、当事者たちを繰り返し悩ませ続けてきたのである。

そもそも「西」（ヨーロッパ）とは何を意味するだろうか。こ

金子書房
http://www.kanekoshobo.co.jp

女性のからだとこころ
自分らしく生きるための絆をもとめて
内田伸子 編著
発達心理学、社会心理学、医療・看護学、運動生理学、老年学などから女性の生涯発達を考える。人生の節目で遭遇する課題へ立ち向かうのに役立つ12章。
A5判・272頁 定価2,835円（税込）

発達障害は生きづらさをつくりだすのか
現場からの報告と実践のための提言
田中康雄 編著
乳幼児期から成人まで幅広いライフステージを背景とした臨床と研究をベースに「本人視点・現場視点」の発達障害理解のあり方を再考する。
A5判・160頁 定価1,995円（税込）



〒112-0012 文京区大塚3-3-7
☎03-3941-0111 F03-3941-0163

の問題に関する膨大な議論の蓄積は敢えて脇におくとして、一つの単純な答え方は、ヨーロッパとはキリスト教圏だ、というものである。宗教圏と文明圏の関係も微妙な問題だが、両者を大きく一まとめにして、キリスト教圏とイスラーム圏を対置する「文明の衝突」論――あるいは、それを批判する「文明の対話」論――は、やや通俗的に過ぎる観があるとはいえ、実際問題として大きな影響力をもっている。

ひとまずこの観点に沿って考えようとする場合、収まりが悪いのは東方正教会圏である。というのも、西欧の多くの人々は、ヨーロッパとは西方教会圏――東西教会分離の時点でいえばカトリック圏だが、後にその中からプロテスタントが生まれるので、いわばカトリック・プラス・プロテスタント圏――だけを指すと考え、東方正教会圏をそこから除外する思考様式に傾斜しがちだからである。西欧での主流的な見方によるなら、ビザンツ帝国の文明は「専制的」「権威主義的」などの特徴をもち、それがロシアにも受け継がれたので、そこにヨーロッパとの異質性があるとされる。このような把握の妥当性については別途立ち入った検討を要するが、ともかく東方正教会圏は、「ヨーロッパ＝キリスト教圏」という概念を広義に理解するならその一部だが、西方教会圏こそがヨーロッパだという発想に立つなら、その外なる存在として「異質」視されるという両義性があり、そのことがこの地域の位置づけを難しいものにしている。話を敢えて飛躍させるなら、一九九〇年代の旧ユーゴスラヴィア内戦にしろ、二一世紀初頭に進行したEUの東方拡大にしろ、あるいは一部でささやかれた「新しい冷戦の兆し」論にしろ、東方正教会圏に属するロシアやセルビアを「西」にとって「異質」とする感覚が――それがどこまで強い規定力をもったかは別として――陰に陽に作用していた。

ロシアのもう一つの特徴は、非キリスト教世界を広く抱え込んでいる点にある。現代ロシアのムスリムは、ロシアにおけるイスラームの伝統はキリスト教よりも古いと主張している。人口からいっても、第一次世界大戦前夜におけるロシア帝国にはオスマン帝国よりも多くのムスリムがいた。ロシア・ソ連の対ムスリム政策は時期によって揺れているが、ともかく無視できない少数派としての重みをもっていたという点は一貫する前提条件である。さらにまた、「西」の世界の中で特異な位置を占めるユダヤ教についていえば、一八世紀末のポーランド分割以降、ロシア帝国は世界最大規模のユダヤ人口を抱え込んでいた。

このような多宗教・多民族・多言語性は、この国の歴史の様々な局面を彩ってきた。比較的現代に近い一つの興味深い事例として、一九九七年宗教法制定時の経緯がある。ゴルバチョフ期のソ連宗教法（一九九〇年一〇月）が宗教の自由を幅広く認めた後、ソ連解体後の精神的空白の中でオウム真理教などが急激に進出した状況への危機感を背景に、新生ロシア連邦の宗教法制の骨格となるべきこの法律は、外来の新興勢力への規制

の要素を含むものとなった。一九九七年六月に下院、七月に上院を通過した段階での法案は、その前文で、「全ロシア的な歴史的・精神的・文化的遺産の不可分の一部」としての正教を筆頭に、イスラーム、ユダヤ教、仏教に言及することで、この四者を特別扱いする姿勢を示した（仏教が挙げられているのは、カルムィク、トゥヴァ、ブリヤートの三民族がチベット仏教の伝統をもつため）。そして、伝統的宗教団体とその他の宗教団体の間には明確な法的地位の差が設定され、外国人による布教活動はかなり厳しい規制のもとにおかれることになった。これは危険な新興カルト浸透防止のためということで正当化されたが、欧米諸国からは、宗教団体間に差別を持ち込み、正教を優位におくものだという批判が浴びせられた。特に問題となったのは、前文で挙げられた四大宗教にカトリックが含まれていない点であり、米上院はこの法案が成立するならロシアへの援助を差し止めるという決議を採択した。

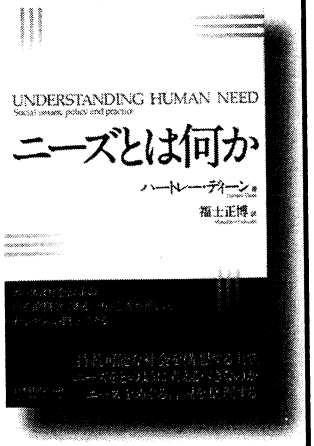
このような外圧をうけ、法案はいったん国会に差し戻され、修正された宗教法は同年九月に改めて採択された。当初の法案と比べての最も大きな差異は、「ロシア諸民族の歴史的遺産の不可分の一部をなすキリスト教、イスラーム、仏教、ユダヤ教、その他の宗教」の尊重という表現をとった点にある。「キリスト教」という文言をとることで、カトリックやプロテスタントも伝統的宗教に含まれうることになり、西欧からの批判をかわそうとしたものである。しかし、前文はロシアを「世俗国家」とする一方、「ロシアの歴史、その精神性および文化の形成と発展における正教の特別の役割」にも言及しているし、宗教団体間に法的地位の差がある構造自体は維持された。図式化していえば、「特別の役割」を認められた正教、「歴史的遺産の不可分の一部」と認められた一連の宗教、それらよりも格下の

ハートレー・ディーン／福士正博訳

ニーズとは何か

Understanding Human Need

四六判並製　337頁
定価 3,990円



ニーズは社会政策の中心的概念である一方、定義が難しい、わかりづらい概念である。持続可能な社会を構想する上で、ニーズをどのように考えるべきなのか。ニーズをめぐる言説を整理する。

日本経済評論社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-2
TEL.03(3230)1661 FAX.03(3265)2993
http://nikkeihyo.co.jp（価格は税込）

位置づけにとどまる諸派、そして規制と警戒の対象となる新興カルトといった重層構造が法制化されたということになる。

歴史を振り返るなら、帝政ロシアも、正教を「帝国において首位に立つ支配的な信仰」と定める一方、他の諸派を全面的に禁圧するのではなく、寛容の対象として公認の位置を占める宗教（カトリック、ルター派、アルメニア・グレゴリウス派、ユダヤ教、イスラーム等）と、その外にある宗派（分離派等）という区別を法的に設定していた。ソヴェト時代においては、マルクス＝レーニン主義がいわば「首位に立つ支配的なイデオロギー」の位置を与えられると同時に、体制と妥協することで限定的ながら寛容の対象となった宗教（正教、アルメニア教会、イスラーム等）とそこから排除された宗教（典型例として、西ウクライナのユニエイト）という構造があったと考えれば、このような重層構造は歴史を通じて一貫していることになる。その際、「首位」に置かれた正教あるいはマルクス＝レーニン主義は、その起源が「西」にある一方、「東」的な性格を帯びてもいるという両義性があり、またイスラームその他の「非西欧的」要素も条件付きで寛容され、体制統合に貢献した点に一つの特徴がある。

やや限定された視角からの議論になってしまったが、一般論として、多宗教・多民族・多言語の国家――現代のロシア連邦は、かつてのロシア帝国やソ連邦に比べれば、領土が縮小した分、多民族性が低下しているが、それでも同様の性格はなお連続している――は、一面では、国民統合のための単一理念を求める傾向があるが、同時に、現にある大きな多様性を全面的に押しつぶすのは非現実的であるため、徹底した単一化を追求するのではなく、むしろ多様性の限定的温存を図ることが多い。場合によっては、そのような多様性こそがむしろ誇るべき個性とされることもある。一部のロシア・ナショナリストは、ロシア人は傲慢な西欧諸国民と違って、異文明に対して寛容であり、そうした「心の広さ」こそがロシアの特徴だと主張することがあるが、その自己満足的な主張の当否はさておき、彼らがそのように考える背景には、いま見てきたような現実がある。

［編集委員］塩川伸明・小松久男・沼野充義

ユーラシア世界［全5巻］刊行開始

A5判・平均二八〇頁・各四七二五円

1 〈東〉と〈西〉
2 ディアスポラ論
3 記憶とユートピア
4 公共圏と親密圏
5 国家と国際関係

東京大学出版会（表示は税込価格）

「文明の衝突か文明の対話か」が問題にされるとき、その基本単位として、「ヨーロッパ」とか「イスラーム圏」とか「東アジア世界」といった「文明圏」が自明の実体として暗に想定されがちである。しかし、現実には、そうした単位が確定的なものとして存在しているわけではなく、むしろそこには多重性や流動性がある。そして、そのことは「異質」と見なされがちなもの同士の間での越境や相互浸透をもたらしたり、それぞれの性格の変容を引き起こしたりする。

このこと自体は、どこについても当てはまる一般論だが、それがとりわけ大きな意味をもつのが、ロシア帝国からソ連邦に引き継がれ、いまでは一五の独立国家となっている空間である。この空間を「ユーラシア世界」と呼ぶとして、この世界は何らかの一つの特徴の共有によって結ばれているというよりも、むしろ多種多様な要素が接触し合い、越境や摩擦と変容を繰り返す場だという点こそが、その最も興味深い特徴をなしている。そこには「ヨーロッパ的なもの」もあれば、「イスラーム世界」に属する要素もあり、そして「東アジア世界」と重なる部分もある。このような独自な世界の研究は、地域の枠を超えた地域研究、そして学問分野間の境界を越えたマルチディシプリナリーな研究として進めるほかない。「越境」と「変容」をキーワードとするシリーズ『ユーラシア世界』全五巻は、そのような越境的研究の礎石を築こうとするものである。

（しおかわ・のぶあき　ロシア・旧ソ連諸国政治史）

シンポジウムのお知らせ

シリーズ『ユーラシア世界』刊行記念シンポジウム

ユーラシア研究の新しい地平――越境と変容の現場へ

第1部　越境と変容の現場へ

前田弘毅（首都大学東京）／司会　小松久男（東京外国語大学）

「ツァーリとシャーに仕えたアルメニア人――〈言葉の箱〉と呼ばれた一族の活動から」

加藤有子（東京大学）／司会　沼野充義（東京大学）

「両大戦間期ガリツィアの文芸界とユダヤ人」

池田嘉郎（東京理科大学）／司会　塩川伸明（東京大学）

「ロシア『十月のレーニン』とスターリン時代の革命映画」

第2部　ユーラシア研究の新しい地平

1　基調講演「ユーラシア研究の魅力」

特別ゲスト　亀山郁夫（東京外国語大学学長）

2　パネルディスカッション

亀山郁夫＋塩川伸明・小松久男・沼野充義／

司会　中嶋毅（首都大学東京）

日　時　二〇一二年七月一六日（月、祝日）

一四時三〇分―一七時四五分

場　所　東京大学文学部（本郷キャンパス）1番大教室

参加費無料・申込不要

主　催　「ユーラシア世界」編集委員会

共　催　東京大学出版会、東京大学文学部現代文芸論研究室